

平成 27 年度
日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック
第 8 回海外研修 報告書
2015 年 11 月 21 日～24 日（タイ・バンコク）



日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック

日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック 第8回海外研修バンコク（タイ）

【主催】日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック

日 時 2015年11月21日（土）～11月24日（火） ■2泊4日 旅行先 バンコク（タイ） 募集人員 20～25名

旅行代金 ■旅行代金：福岡発着（エコノミー） ￥139,800（2名1室利用） ￥159,800（1名1室利用）
■旅行代金：福岡発着（ビジネス） ￥299,800（2名1室利用） ￥319,800（1名1室利用）

申込閉切日 2015年10月16日（金） お申込先 （有） SQUARE 福岡市中央区天神5-10-1 TEL:092-717-7177 FAX:092-717-7155

バンコク（タイ）福祉研修【アジアナ航空 ソウル経由】

1 2015年 11月21日 (土)	空港集合 福岡 ソウル ソウル バンコク	13:00 14:50 16:10 18:20 22:10	0Z133 0Z741	福岡空港国際線ターミナル集合 福岡よりアジアナ航空でソウルへ（乗換） バンコクへ～ホテルへご案内します。 【バンコク泊】	昼：機内食 （軽食） 夜：機内食
2 11月22日 (日)				午前：バンコク市内観光へご案内 「暁の寺、王宮・エメラルド寺院、涅槃寺」 昼食：レストラン 午後：ショッピングにご案内します。 夕食：レストラン ホテルへご案内します。 【バンコク泊】	朝：ホテル 昼：レストラン 夜：レストラン
3 11月23日 (月)	バンコク	00:15		終日：福祉関連施設視察及び訪問（予定） ① Foundation For Slum Child Care（児童福祉施設） ② Ditsara Nursing Home（老人福祉施設・老人ホーム） 昼食：レストラン ③ Phrapradaeng Home For The Disabled People （身体障がい者施設） ④ Phrapradaeng Ocatinal Rehabilitaion Centre for The Disabled Person（身体障がい者訓練施設） 夕食：レストラン 夕食後：ナイトマーケット～空港へ アジアナ航空でソウルへ 【機中泊】	朝：ホテル 昼：レストラン 夜：レストラン
4 11月24日 (火)	ソウル ソウル 福岡	07:50 09:10 10:30	0Z742 0Z132	ソウル（乗換）福岡へ	朝：機内食 （軽食）

参加者名簿&報告書該当ページ

	氏名	施設名	役職	県	報告書
1	岡田 好清	善隣保育園	園長	熊本	P.3-4
2	甲斐 國英	熊本乳児院	院長	熊本	P.5
3	山田 茂樹	スカイ保育園	園長	愛知	P.6
4	石丸 翠	社会福祉法人 福翠会	理事長	長崎	P.7-9
5	森 恵律子	いちご保育園	園長	長崎	P.10-11
6	金澤 武典	障がい者支援施設 星光園	施設長	熊本	P.12-13
7	清水 珠香子	七つの星幼稚舎	施設長	宮崎	P.14-21
8	錦織 和代	養護老人ホーム 長浜和光園	副園長	島根	P.22
9	蓮池 年民	介護老人福祉施設 日迎の園	施設長	福岡	—
10	安達 照二	(有)SQUARE (添乗員)	代表取締役	福岡	—

※ 団長：岡田 好清

副団長：蓮池 年民

コーディネーター：安達 照二



日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック

平成 27 年度 海外研修報告

日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック 会長
熊本県 社会福祉法人 善隣福祉会 善隣保育園
園長 岡田 好清

九州・沖縄ブロックでは、平成 27 年度海外視察研修を平成 27 年 11 月 21 日から 11 月 24 日までの日程で、タイ・バンコク市で実施し、添乗員を含めて 10 名が参加した。本ブロックでは、「福祉の原点を学ぶ」という趣旨で、アジア諸国の中の福祉施設を対象に毎年度、海外研修の機会を設けている。以下に、研修内容の概況を報告する。

【研修概況】

海外研修も 8 回目となり、事業としては定着してきたが、今回も昨年同様、参加者募集には苦労することになり、添乗者を含め 10 名の参加となった。全社協国際部に紹介いただいた施設と併せて 4 施設を視察した。日程の関係で、11 月 22 日、やや過密なスケジュールであったが、それぞれ 4 施設を訪れた。最初に、『Foundation For Slum Child Care』というスラム地区にある児童福祉施設。ここは、貧困や犯罪により親が育てることが出来なくなった子ども達を日中預かっている。タイ国内だけでなく、ラオスやミャンマーといった隣国の子ども達も預かっている。預かるだけでなく、親たちへの教育や子育て支援も行っているということだ。代表者によるプレゼンのあと、保育室等を案内して頂き、子ども達の歌での歓迎を受ける。

次に、『Ditsara Nursing Home』というリハビリテーションをメインにした有料老人施設を視察した。2 施設で 200 名の利用者がいる。ようご看護学校も併設されており、卒業生の 20% はそのまま当施設に就職するということだ。利用料が 2 万バーツ、日本円で 6 万 5 千円程度で、タイでは高級な施設等位置づけで、高所得層が対象となっている。

3 番目に訪れたのが、『Phrapradaeng Home For The Disabled People』という身体障がい者施設で、生活支援を行うタイで初めての障がい者支援施設。18 歳以上の男女を対象に、生活支援、リハビリテーション、レクリエーションなどのサービスが提供されている。

最後は、『Phrapradaeng Ocational Rehabilitation Center For The Disabled Person』という障がい者の職業訓練センターを視察した。日本でいう就労支援施設で、コンピュータ、皮革加工、手工芸、被服縫製などのコースがある。それぞれ、選択したコースで熱心に作業に従事されていた。ここでの職業訓練を通し、自立した生活ができるよう援助することで、わずかではあるが、一般企業への就職事例もあるとのことだった。



以上、簡単に視察の内容に触れたが、詳細なレポートは、日本福祉施設士会のホームページにも掲載されているので、アクセスして頂きたい。以下、団長としての所感を述べる。

【団長所感】

タイは、東南アジアの中では先進部分を有するところだが、福祉については今回訪問した施設の現況を見ても、公的資金投入が低く、財政基盤が弱い。それを寄付やマンパワーで補われている。現在、全社協で行われている『実習生受け入れ事業』による福祉スキルの向上というソフト面での支援は、かなり定着してきているが、いかんせん財政上の制約もあり、量の拡大は限界があるので、「今後本会もこの事業に参加することで、何らかの貢献ができるのではないか」、「国情や文化の違いを前提としつつ福祉分野での国際交流を図っていくことは、今後も必要」との思いを大にした。

今回は、前回カンボジアで行った井戸贈呈に伴う地域住民との交流のような直接交流はなかったが、いずれの視察先でも温かい歓迎を受けた。前記の交流と重なるが、施設の視察だけではなく、「現地での地域の方々との交流」も今後メニューに加えていけたらと思う。

全般を通してハードなスケジュールであったが、参加者全員、訪問施設での受講、交流共に熱心で、真摯に研修と向き合っていたいただき、本会の『学習団体としての特性』を改めて感じる事ができた。これには、私たちを快く受け入れて頂いた施設の代表者や各スタッフの方々、通訳を務めて頂いた花栗佳江さんと現地のソムラックさんのご尽力に負うところが大きい。改めて、感謝したい。また、視察先の紹介や手配等でご協力いただいた全社協国際部、今回も視察先の手配から日程全般にお世話頂いた(有)スクエアの安達さんにもお礼を申し上げたい。

最後に、今回の研修が参加者各位にとって少しでも有意義なものとなることを願い、また、全員同士の絆が深まることを期待したい。



[一口コメント]

タイと言えばトムヤンクン、山田長政位しか思いあたらない私にとって正に無知から未知との遭遇の旅となった。

[レポート本文]

今回初回からオール参加の海外研修も何と 8 回目となり、主だった東南アジア諸国は殆ど渡航済となり一抹の寂しさを覚える中、余裕の午後からの福岡空港集合ということで餞別も見送りもない我が家から恒例のいい日旅立ちをし、ソウル乗り換えでバンコクへ真夜中の到着となる。いやはやいつものことながら彼の地も暑いと冷えたビールで就寝となる。

翌日は日曜日ということもあり、バンコク市内のエメラルド寺院等を廻るが入場料無料（おまけに不敬にあたるので足の露出禁止）で人がごった返し、いやがうえにも熱気が渦巻く中を此の地が僧侶と王様と象の国であることを実感する。タイ料理の昼食後、邦人向けスーパーで現地のチョコを購入したらなんとベルギー産、おまけに暑さで溶けて終わった。

夕食を今回の視察団の仲間（何と全員が顔見知り）と共にし、明日からの本番視察に向けて、名古屋の山田園長の豪華ルームで岡田会長以下若干名が氣勢を上げた。翌朝太陽がいっぱいというより眩しい中、スラム児童ケア財団を皮切りに、老人施設、プラパーデン障がい者ホーム、プラプラデン障がい者職業訓練センターを一日かけて廻ったが、児童の施設も王族の援助で成り立っており、子どもの貧困と親のそれとの連鎖の重さに愕然とした。

老人施設は有料であり比較的富裕層が対象であり、障がい者施設でも入所者は約 600 人（18 歳～80 歳）である一方、それに対する職員数は 73 名。今後のハード、ソフト面の整備が喫緊の課題であるが、如何せん先立つものに事欠く始末。

日本からの指導もあつてか「在宅へのシフト」がなされているようだが、わが国の在宅福祉も施設ケアよりある意味コスト高になっていることを考えると、「タイ独自の障がい者施策」が望まれる。世界に社会保障制度の真の成功事例は皆無なのだから…。

皆様のお蔭で今回何の騒動も起こさず、静かに第 8 回目の視察を終えることが出来ました。心より感謝申し上げます。また来年再会を。

【一口コメント】

今回の研修会に参加をさせて頂き誠に有難うございます、私共の法人は、保育所の運営のみを行っております（名古屋・東京・横浜、全19保育所）。今回海外研修に参加された日本福祉施設士会会員の皆様方の運営主体が違うことも有り、研修先が、福祉関連施設（老人・障がい・授産・介護・保育等）の多施設に渡っていて、毎回とても有意義な研修である為、見分が大変広がります。

【レポート本文】

第8回目研修会も、岡田好清団長の下、10名にて行って参りました。滞在先においては、参加メンバーの皆様方に大変お世話になり誠に有難うございました、深く感謝を申し上げます。

私、山田茂樹は法人本部が名古屋市にありますので、2015年11月21日（土）に、一人にて中部国際空港（セントレア）より直行便で、バンコク（タイ）のスワンナプーム空港（現地時間午後3時40分着）に降り立ち、タイ市街地にあります、エバーグリーン・ローレルホテルにチェックインを致し、福岡空港からの岡田団長をはじめとする皆様をお待ちいたしておりました。現地時間午後10時を過ぎてのご到着で有りましたが、岡田団長達とウエルカムドリンクにて再会の乾杯から研修旅行の始まりでありました。

研修第一日目は、午前中は、暁のお寺・王宮殿・エメラルド寺院・涅槃寺を巡り、バンコクの歴史の深さや、素晴らしさに感動を致しました。午後以降は古い町並みを巡りながらの名産品等の買物等も致しました。また、夜の晚餐は、美しいタイレストランの名物料理とタイの楽器演奏にて、民族舞踊を鑑賞させて頂き、誠にしなやかな踊りと、繊細な響きを奏でる演奏に心を打たれました。

研修二日目は、終日、福祉関連施設及び訪問で有ります。

（訪問先は以下の4施設）

- ①『Foundation For Slum Child Care』（児童福祉施設）
- ②『Ditsara Nursing Home』（老人福祉施設・老人ホーム）
- ③『Phrapradaeng Home For The Disabled People』（身体障がい者施設）
- ④『Phrapradaeng Ocational Rehabilitation Center For The Disabled Person』（身体障がい者訓練施設）

①から④までの施設見学等は、とても充実した施設で有り、施設職員の笑顔が美しかったです。今後も益々、施設・機器等の充実がなされるものと推察されます。

*二日目最後の晚餐は、中華料理の蟹をメインとするコースでとても美味で有りました！

【一口コメント】

本年は、複数の施設整備の最中、又、1週間後のライオンズのFORUMへの参加のため欠席やむなしと思っている時、電話をいただき、「継続は力なり」、変な理屈をつけ参加する。帰国後、聖母の騎士養護施設のお餅つきボランティアに参加し、置き去りの幼児に出会い（園長より、入所当初は1日5食の食事提供が基本で、こころが落ち着き、その後保育、養護へと続きます。）とお聞きし、「人間基本的に、世界中共通なんだ・・・」と実感。

今回の思いを、次世代の継続に、今後の事業経営に、地域福祉の充実に貢献していきたいと思った次第です。

事前準備等ご配慮いただきました役員の方々、スクエアの安達様、心より感謝申し上げます。

【レポート本文】

平成27年11月21日（土）、福岡空港12時50分集合。2泊4日のハードな旅の始まり。ソウルで乗り換え、現地時間午後10時過ぎに12年振りのバンコク到着。アジア最大規模の空港への変貌に驚く。前回に続き、夜遅くホテル着。

<2日目 バンコク市内観光>

暁の寺、王宮、エメラルド寺院 とにかくどこへ行っても人、人、人・・・。
12月5日の「王様の誕生祭」の準備と、ライオンズの「東南アジア OSEAR FORUM」が12月3日から6日までと重なり、準備で車が動けない。それでなくても中国人の観光客が多いのに、バスが迂回できず、オートバイにリヤカーをくっつけたトットットに大人4人乗る。落ちそうで、ハラハラ。雑踏とよどんだ風を感じながら、車の間をぬって行く。バスよりとても速い、又、水上ボートでの移動も早い。水しぶきを感じながら人々の暮らしぶりを見る。これも早い、初めての経験。

<3日目>

【 Foundation For Slum Child Care スラム児童ケア財団 視察 】

国王の姉が設立。国王の長女が引き継ぎ継続している財団である。スラム街育児のために設立され、若い子供たちに医療提供を開始し、その後、日本と同様核家族化により、赤ちゃんや小さい幼児の保育施設がつけられています。20数年前は、王様の施設で、部屋の仕切りが、金網で、収容の印象が強かったが、建物は新しく先生は数多くなった今も、需要のニーズは違えど、数多くの子供たちがいる現状に、驚かされます。100人の子供のうち100%の子供は家庭がバラバラで、ドラッグや犯罪で刑務所に親がいる。0歳から5歳児、その中で生後1か月の赤ちゃんが、小さく、青白く、おもわず抱っこしてしまいました。目をくるくるさせながら、私をジーとみるので

す。1 か月ということは、産休も明けていない状態です。ミルクを嘔吐したので赤ちゃんを職員さんにお返しし謝罪しようとする、「抱っこしてあげてください」と逆に言われました。

食事は、一日 5 食の提供です。飲むことも、食べることもロクにされてこなかったもので、ここへ来た当初はミルク、食事を受け付けないとのことでした。とてもショックなことです。母親の麻薬、犯罪のため子供を収容して治療をする。その後のことが重要で、親の教育指導、父親の育児の参加の援助を行なっている。一年に 600 人のセミナー参加で、186 か所のコミュニティの活動の中で貧困スラムの子供の保育をしている。他ミャンマー、ラオスの施設で一日 300 人の子供を預かっている。現在 843 か所のネットワークができた。子供だけでなく、親の指導、教育が最も重要だといわれました。

現在の日本の中でも、核家族化の中で『親の教育が必要』と思われる場面に保育のなかで幾度も遭遇します。現在、日本では 6 人に 1 人。つまり、360 万人の子供の貧困対策として 2016 年政府予算のなかで 10 億円の予算が新たに要求通り認められたところです。日本だけでなく、全世界のなかで 8 億人の子供が飢えている現状に、再度痛感する。



【 Ditsara Nursing Home 老人福祉施設・老人ホーム 視察 】

200 人のナーシングホームで、老人介護が 10%で残り 90%はリハビリである。24 時間対応で、ドクター1 人・理学療法士 2 人・介護士 50 人のスタッフを擁する。介護士養成学校も併設のため介護中心ではない。月 2 万バーツ（日本円で 6 万円）と高額であり、自費で支払える人に利用は限られる。

学生も月謝を払い、利用者介護をし、利用料金も高額、日本でいう有料老人ホームのようでした。

【 Phrapradaeng Home For The Disabled People 身体障がい者施設 視察 】

470 人の入居者、看護師 1 人、理学・作業療法士 1 人ずつ（9 月まで） 医師・教育者は外部から呼ぶとのこと。100 人以上の企業は、1%の障害者を働かせるシステムがあり。教育が終わ

ると働く。作業療法にて1人の指導者に対して15人の障害者が付き、制作をする。制作品は、籠、バックなど。施設入居者は全部で474人（うち女性238人、男性236人）。内訳は以下の通りです。

難聴者	18人
身体障害者	208人
精神障害者	27人
精神漏話者	99人
LD学習障害者	39人
複合障害	83人

つまり、474人に対して、職員70人 職員の数が課題といえる。



【一口コメント】

25年程前に、バンコクの高齢者施設を訪問しました。コンクリートの床に鉄柵の仕切り、中には、むき出しのトイレとベッドだけでした。現在も、そのような施設はあるとの事でしたが、今回訪問させて頂いた施設は、日本でのサービス高齢者住宅のようでした。バンコクの平均所得が12,000円/月に対し、施設の基本料金が65,000円/月と、かなりの高額でした。施設の職員さんも、バッチリメイクにミニスカート・・・その方が利用者さんから喜ばれるからの事でした。

【レポート本文】

「バンコクに住む人は、核家族が多く、核家族で仕事をするためには、別の家に住む祖父母に預け、親子が別々に生活していました。しかし、保育施設ができたことで、家族と一緒に生活できるようになりました。」と、誇らしげに説明される言葉に、改めて、「保育施設の在り方」を再確認しました。

しかし、その現状は、スラムの中に位置する保育施設でしたので、貧困世帯と家庭に事情を抱えた世帯が100%でした。家庭に事情を抱えた世帯とは、保護者が犯罪者かドラッグ・・・。

保育の中で力を注いでいる内容は、以下の3つでした。

1. 食事を与える。
2. 親が若年層であるので、親教育と、父親の育児参加。
3. 地域での活動

命をつなぐために食事を与え、子育ての方法を親に伝え、子どもの命をつなぐために、地域の方の支援をお願いします。つまり、**保育の質＝衣食住の確保**でした。保育施設の開所時間が7:30～16:00なので、それ以外の時間は、地域の方に見て頂いているとの事でした。186ヶ所もある地域の家庭で個人的に育児をして頂くために、コーディネートを務める等、ネットワークの軸となっているのも保育施設でした。

私立といっても財政は、100%が寄付金でした。本来は、90円/日の保育料を頂くようになっていましたが、利用者層が貧困世帯と刑務所に入っている世帯ですので、払える人がいません。だからといって預からないと、子どもの命が危ない。子どもの命を守るために、このような活動に賛同した個人の方が、銀行など400ヶ所に設置された募金箱に寄付をし、一年で2,200万円の寄付金が集まるとのことで、子ども達の命が支えられている仕組みに感動しました。

下記の写真は、1ヶ月の赤ちゃんです。石丸理事長が抱っこすると、しっかり目を見開いて目

を合わせていました。1ヶ月・・・寝ている時間がほとんどの赤ちゃんが、こんなに目を見開く表情に、生きようとする生命力の強さを感じたものです。

また、この1ヶ月の赤ちゃんは、地域の家庭に預けず、スタッフさんが交代で自分の自宅に連れて帰っているということでした。戸籍もなく、親がどこの国の人かもわからない、そんな子ども達の命を守ろうと、当然のごとく行われている活動に、「熱い福祉の心」を感じました。

施設の物的環境は、潤沢ではなく狭い空間での保育でした。絵本も一人1冊あるわけではありません。しかし、ちょっとした空間に花などが飾られ、すれ違うスタッフの方が笑顔で挨拶をされるなど、愛情溢れるバンコクでした。



【一口コメント】

日本福祉施設士会九州・沖縄ブロック第8回海外研修に参加させて頂きました。私個人としては4度目の参加ということで、他の参加者の皆様も顔なじみの方が増え、リラックスした中での研修となりました。タイはASEANの中でも成功した国の一つということで、確かに首都バンコクは多くの高層ビルが建ち並び、人々は活気に満ちあふれエネルギッシュな印象でしたが、急激な発展に伴い格差が広がりスラム街なども急激に増えているとのこと。アジアにおける福祉の原点と発展途上にある福祉現場から多くの学びをいただいた貴重な研修の機会となりました。日本福祉施設士会九州・沖縄ブロックの皆様、手配頂いた(株)SQUAREの皆様にあらためて感謝申し上げます。

【レポート本文】

初日の移動日は午後福岡を出発、韓国・仁川を経由しタイの首都バンコク、スワンナプーム国際空港へ。現地到着は22時過ぎとなりましたが、東南アジアのハブ空港の役割もあるということでそんな時間でも多くの人で賑わっていました。

初日は日曜ということで、バンコク市内の名所巡りでした。王宮やエメラルド寺院などを案内頂き、ボートやトゥクトゥク（オート三輪のようなタクシー）乗車など珍しい経験をさせて頂きました。またタイは日本との経済のつながりも深く、特に自動車に関しては9割以上が日本車、日本以上に日本車が多いように見受けられます。車線も左側走行なので、まるで日本にいるような感覚を覚えます。この日を通してバンコクで感じたのが、暑さと人の多さです。暑さはある程度覚悟してはいたのですが、実際に日中の33度を体感すると、11月の日本から来た身にはかなり堪えます。それに輪をかけて人の波。ハブになる都市だけあって、アジアの人々のみならず西洋からも多くの観光客が押し寄せ行く先々で熱気と多種多様な民族の渦に巻き込まれます。正に観光都市の面目躍如といったところでしょうか。

もう一つ印象的なのがタイ国民の国王や王室に対する敬意です。街中の至る所にラーマ9世の写真が掲げてあり、まもなく訪れる国王の誕生日を祝うため、イメージカラーのイエローで街がデコレーションされています。聞くところによると、ラーマ9世はその人柄と高い見識から国民の人气が非常に高いということで、国民が進んで国主の生誕を祝おうと準備しているとのこと。人々の心の拠り所になっているということを実感しました。

2日目は4カ所の福祉関連事業所を訪問しました。まず、『FOUNDATION FOR SLUM CHILD CARE』というスラム地区の児童施設。ここは貧困や犯罪のため親が育てられなくなった子ども達を日中預かる施設で、タイ国内だけにとどまらずミャンマーやラオスといった隣国からの労働者の子ども達も預かっているということです。特徴としては子どもを預かるだけではなく、育てら

れなくなった親たちへの教育や地域での子育て支援についても指導を行っているということです。バンコク内に同様の施設が4カ所、500名の子ども達が通い、70名のスタッフ・300名のボランティアで運営されています。スラム街の育児には欠かせない施設であると実感しました。

続いて訪れたのが、『DITSARA NURSING HOME』という高齢者施設。開設から4年が経過した営利企業ということで、2施設で200名の利用者が生活する、日本で言う老健のような機能を持った施設です。入居者の利用料は2万バーツ（日本円で6万5千円程度）で、タイでは高級な施設になるとのことです。看護学校も併設しており卒業生の20%がそのまま職員として残ります。学生にはサービス業としての教育も徹底しているそうで、医療や福祉のプロの養成にも力を入れていることに感心しました。

続いては、『PHRAPRADAENG HOME FOR THE DISABLED PEOPLE』という障害のある方の支援施設です。ここは生活支援を行うタイで初めての障がい者支援施設で、このような施設はタイ全土でまだ4カ所しかないとのこと。特にこれまで教育の機会が少なかった障害のある方のため、外部より教師を迎え入れ教育にも力を入れているとのことでした。健康・知識・社会参加・自立の4つを重点ポイントとして運営されていますが、職員の人手不足の問題もあり、軽度の障がい者が重度の障がい者をサポートすることで人手を補っているのが現状とのことでした。

最後に訪れたのが、『PHRAPRADAENG OCATIONAL REHABILITATION CENTRE FOR THE DISABLED PERSON』という障がいのある方の職業訓練センターで、日本で言う「就労支援施設」にあたると思われます。コンピュータ・皮革加工・手工芸・被服縫製等の職業訓練が充実しており、それらによる自立した生活と、生き甲斐のある生活の支援をしています。日本同様、タイでも一般企業の就業者の1%を障がい者にするという取り決めがあり、この施設の役割も重要になっているとのこと。技術習得、社会参加を含めて、倫理観などの指導も行い自立のための支援にも力を入れているとのことでした。

今回訪問した4つの施設に共通の課題は、運営のための予算の多くを寄付でまかなっていることだと思われます。設立自体は公立であったり、民間であったり、王室や慈善団体がきっかけだったり多様な生い立ちがありましたが、その後の運営は寄付頼りという施設も多いようです。利用される方々への安定的なサービス提供という意味では、「公費による安定性の担保」も今後必要になってくるのかと感じました。また、どの施設も単なる生活支援や就労支援だけでなく、当事者や家族への教育面での支援や人材育成を行っていることが印象的です。スラム出身者や障がいのある方は教育を受ける機会が少ないため、そこを補うためにも、施設がその本来の目的以上の役割を担っていることがよくわかりました。

発展著しいタイ・バンコクですが、それゆえ生活格差の影響は大きくなっているようです。それを補う意味でも、福祉施設の存在は益々大きくなっているのだと強く感じる海外研修でした。共にバンコクを訪れた参加者の皆様、留守を守ってくれた事業所のスタッフに改めて感謝申し上げます、報告とさせていただきます。



【一口コメント】

8時にホテルを出発して17時過ぎに4つ目の施設の見学が終わった。どの施設も一行を温かく迎えていただき、説明も丁寧でタイの福祉の現状を知ることが出来た。日本の福祉に学び、指導を受けている施設もあり、福祉の捉え方や取り組みの傾向としては日本の福祉に良く似ているという印象を受けた。家庭、施設、地域の連携が大切であること等は全くその通りであり、持てる者が手厚い世話を受けられることや、負の連鎖も含め国は違っても同じだと感じた。

メインの視察研修は勿論、親日的で穏やかなタイの人々、日本の夏のような冬、美味しい食事や清潔感のあるホテル(旅行業者さんの配慮)、大満足の研修であった。



【レポート本文】

日本福祉施設士会九州・沖縄ブロックの海外研修参加は今回で3回目であったが、タイの福祉の傾向性が日本の福祉に似ており、人々は親日的で充実した4日間を過ごすことが出来た。以下は、訪れたバンコクの4つの福祉施設訪問記である。

1. Foundation For Slum Child Care (スラム児童ケア財団)

スラムの子どもの世話をする施設である。タイのスラムは核家族がほとんどであるため、保育の必要な0歳~5歳の子どもを預かっている。公的な機関もあるが、2歳半から5歳までの年齢になっており、小さな子供のための公的な施設はないので、ここが公を補っていると言える。

この財団には、このような施設が4か所ある。最初の場所は約100人収容している。朝7時30分から4時まで子どもたちを預かっている。

ここの子どもたち100人の親の状況としては、ドラックにおぼれているとか、刑務所に入っているとか、犯罪に関わってしまった家族がバラバラになってしまったというような子供たちを預かっている。残りの3か所の施設に関しては、子どもの抱えている問題としては貧困であるとか家庭内に問題のある子どもたちをデイケアで預かっている。さらに、ミャンマー、ラオス、カンボジアの子どもたちも預かっている。ちなみに、1日平均300人の子どもを預かっている。

るとのこと。0歳から5歳の子どもは、保護の対象として緊急性の高い年齢である。そのため食事や、食育に力を入れている。親は若年層が多いので親の教育にも力を入れており、セミナーにも参加してもらうようにしている。子どもの世話の仕方であるとか、こどもが問題を抱えたときの解決法やそういった指導をしている。一方、父親の育児参加は少ないので、子どもとのかかわり方や食事に関することを教えるために、父親へのセミナーを開催している。なお、一年に大体600人の保護者がセミナーに参加しているそうである。

また、財団の中にとどまらず、コミュニティの中でもいろいろ活動を展開している。子どものいない家庭でも子どもの接し方や正しい子育ての方法、地域全体で子どもを見る方法も指導している。貧困家庭ではきちんとした保育所や幼稚園に入所させる経済的余裕がないので、コミュニティ内で時間のある人に預けることになる。例えば、バンコクのスラムでは186か所の家庭で個人的に子どもを預かっている。一方、こちらの財団では1年に3000人の子どもを預かっている。以前は、実家である田舎の祖父母に子供を預けてバンコクに出稼ぎに出るといったことが主だったが、このような施設があると両親と一緒に生活が出来て、情緒的にも安定して改善に役立っている。’

田舎の方にも幼稚園や保育所で見ると子供たちがいるので、そちらの方にも活動を広げて、そこで働く先生たちを対象にセミナーを開いて、知識を増やしていただくような手伝いもしている。そのセミナーを行っている場所がもう一か所の事務所、ナジャナーという少し北にあるところの施設で行っている。子どものために良い先生になるためのセミナーという考えで二日間にわたって行われる。子どもの価値を高める内容であるとか、子どもの世話の仕方、子どもの権利などについて指導している。1回につき約50人の先生が参加している。これまで全体で25回セミナーを開催した。セミナーを経験した先生たちは延べ2,000人。その先生たちが見ている子供の数は延べ5万人である。参加者した先生たちは58県に及び、現在でも、ネットワークを持ちシェアしながら行っている保育所の数は843か所である。このセンターが先生たちを指導して教育向上のモデルとなっている。タイでは、子どもたちの教育のみならず親たちに対する教育のカリキュラムがきちんと確立していないので、こちらの施設がその役割を担っている。12人の教師がいて他県からも指導して欲しいという要請があるのでいろんな県に出向いてセミナーを開催している。園のスタッフは全体で70名、そのうち先生が30名。その中で12名が県外に行ってセミナーを行える教師である。

ところで、園長は施設の経営にあたっているが、他県に行ってセミナーの講師をしたりもしている。保育料のほとんどは寄付である。1日30バーツ、約90円を保育料として親から貰うようにしているが、みなさん経済的に余裕のない方々で貰えないので、残りの70バーツはほぼ寄付で賄う。年間の諸経費が700万バーツかかる。デイケアの4施設で2千200万円です。募金箱を銀行などの施設に置いてもらっている。400個用意している。ほとんどが個人の寄付で、企業が福祉関係のアクティビティをしていく中で、寄付を募ってと言う形で企業から頂く場合もある。ちなみに、ほぼ国内の個人の寄付である。

子どもの価値を高める教育とは、学ぶ機会すらない子どもたちであるので、食事を与え人間としての最低の生活を与え、病院から来てもらって健康管理をしたり、食育に関して指導する



等、最低限の生活を確保したりするという意味での価値を高める教育である。5歳を過ぎた子供たちは学校へ進学する。

これから案内するデイケアの子どもたちはドラッグ・貧困など、親が問題を抱えている。祖父母しかいない子供もおり、栄養状態が悪いので平均の子どもたちより小さく、健康状態の悪い子供たちが多い。入所が遅い子供たちほど栄養状態が悪い。衣食住に関するすべてのことをここで与えている。親がいない子供に関しては出来るだけ親戚を探す。どうしても見つからない場合は孤児院を紹介したりもしている。

親が捕まって刑務所に入って、例えば5か月の禁固刑であれば、その間の臨時の場所として孤児院や面倒を見てくれる人を探す。15年、20年の刑で子供の成長すら見られないケースは、公の機関に引き渡してそちらで面倒を見る形になる。

デイケアには生後3ヶ月から5歳までの子どもたちがいる。親がどうしても見られないというのであればデイケアセンターで預かり、そのほかの時間に関しては誰か見てくれる人に預け、後は先生たちが家で預かったりもしている。親からの暴力を受けている場合にも、親から離さないといけないのでデイケアセンターで見ている。そのほかの時間も他の場所であるとか先生たちが見ている。ここの先生たちはデイケアの中で活動している人もいれば、コミュニティの中で活動している人もいる。コミュニティで何か問題の有りそうな子供がいれば常に見ていて、こちらで引き取るとかもしている。そういった家庭の親御さんたちに来て頂いて、いろんな話をして今後どういった形で子どもと関わって行けばいいかの指導もして、今後子どもたちが家に帰って良い生活が出来るような環境をつくるといった保護者支援のかたちである。

講義の後、施設内を案内していただき、子どもたちが歌を歌って歓迎してくれた。幼児の持つ屈託のない笑顔があまり見られず、表情が乏しいと感じた。貧困や親がドラッグにおぼれたり、罪を犯したりしている子どもがほとんどとのこと。生後間もない乳児も入所しており、胸が痛んだ。日本でも問題になっている負の連鎖がふと頭をよぎった。

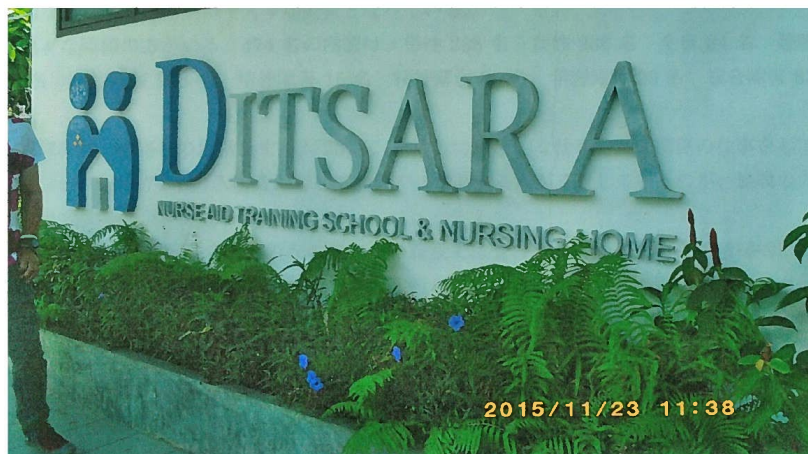


2. Ditsara Nursing Home (老人福祉施設・老人ホーム)

リハビリテーションがメインで(利用者の90%)、患者ケアを24時間行うバンコク市内の有料高齢者福祉施設(企業)である。同様の施設が対岸の地域にもあり、2施設あわせて200人を介護している。看護学校を併設しており、1学年50人から60人の4年制大学で、卒業生の20%がそのまま施設にとどまり80%は他の施設へ就職する。

医師1名、看護1師・看護助手50名、理学療法士1名がいる。理学療法士は直接患者指導をしない。全てのケアを看護師・看護助手が行う。入所対象は60歳から80歳の自力で動ける人で、利用料(室料+介護料)は2万バーツ(日本円で6万5千円)である。タイの平均月収が1万2千バーツ(5万円)であることを考えるとかなり高額と言える。入所審査の結果、別途費用負担の発生する方もいるようだが、あまり重度で手のかかる方はお断りをしているとの事だった。

部屋は個室と大部屋がある。開設して4年目の施設で、責任者が20代から30代と若く、ハツラツと仕事をしており、それが入所者の元気にもつながるようだ。



3. Phrapradaeng Home For The Disabled people (身体障がい者施設)

プラパーデン障害者ホームは、社会開発・人間の安全保障省管轄で、1941年に身寄りがない、もしくは家族で面倒を見られない障害者の保護とリハビリを通じた社会性のある幸福で自立的な生活の促進を目的に設立され、18歳以上の成人男女障害者を対象とした施設である。

生活支援、リハビリテーション、レクリエーションなどのサービスが提供されている。ホームのミッションは、以下の3つである。

- ① 入所者(障害者)のお世話をする。
- ② 学生や研究者の学習施設としての役割
- ③ 地域の障害者に向けた役割

入所者は490名(18歳~80歳)。ナース1名、看護助手4名。毎月、医師が外部から来て、健康診断等を行う。医師は一人一人に必要なものや治療薬や器具の指示を出し、予算と照らし

合わせながら、一人一人に配給していく。入所者は重度障害者なので、治療薬等が必要になる。毎日リハビリを行っている。

タイの法律では、100名以上の企業は「1%以上」の障害者を雇用することが義務づけられている。そのためには、教育を受けた障害者であることが必然的に要求される。この施設では、リハビリを受けた障害者に知識をつけてもらって、そのうえで社会に出ていくというシステムを採っている。彼らは、『手に職をつける訓練』をしている。具体的には、竹かご編みに関して、指導者一人に対し障害者は15人、竹のバック作りは6名が作業している。さらに、アクティビティとして、タイのいろいろな伝統行事を取り入れて障害者にも一般の人と同じように行事を楽しんで貰おうという試みもしている。ほとんどの障害者は、身寄りがなく、行事もやったことがないので精神的な面での楽しみということで大事な要素となっている。

色々な障害の方がいる。474名の内訳は、男性238名・女性236名で、全盲34名・難聴10名・身体障害208名・精神障害15名・精神薄弱95名・学習障害29名・複合障害83名・職員73名・障害者の世話をする人23名。その他は事務的な仕事や助成関係の仕事をしている。23名は474名の入所者に対しての数で、世話する人が不足しているのが、施設の大きな問題である。

タイで初めての障害者の施設なので、他の施設では受け入れ困難な入所者も積極的に受け入れられているため、他の障害者施設よりも入所者が多い。それに対して職員が少ないというのは問題である。

タイではこのような公的機関としての施設が、全国に4か所ある。民間のほとんどはDay Carで、24時間体制で衣食住を提供して面倒を見る施設はNGOでもない。職員が少ないということもあるが、タイで最初に出来た公的機関の施設であることから積極的にボランティアの方々を募集していて、障害者に対してのコミットを取り入れるという意味での啓蒙の場所としての役割も果たしている。安全保障省社会発展庁の中にある障害者支援及び質の向上局管轄の施設になる。安全保障省の管轄なので障害者の安全の保障に重きを置いている。

こちらのセンターでは、以下の4つのことを重視している。

- ① 障害者の健康
- ② 学問的知識を付けていただく
- ③ 社会参加、社会の中で障害者の地位の向上をするために社会の方々に障害者のことを知っていただくこと。障害者が積極的に社会の中に入っていくこと。
- ④ 手に職をつけて自立していくようにする。

センターではこれらの4つのことを重点的に行っている。そのためには障害者の方が安心して生活できる環境を提供している。そのために必要な物資とか、洋服や衣食住に関わる事すべてをセンターで提供している。お金を渡すことはないが必要な場合は、必要かどうかを職員が精査して、少しなりを提供している。



年間1千万パーツ(3千5百万円位)が国の予算から出ており、職員の給与や運営費に充てられる。といっても、これでは足りないので様々な財団からの寄付によって賄っている。1日1人当たりの食費が3食57パーツ(180円)位である。お金に関しては財団の援助を受けている。

夜間は4つの部屋に分けて1部屋を一人で見守る。他にパトロール的な方が2名。したがって、4名+警備員2名の計6名でやっている。それではとても間に合わないので、軽度の障害を持っている入所者が他の手伝いの必要な入所者を看ている状況である。しかし、今回訪問したセンターは、重度で高齢の入所者が多いので、その辺が問題である。このような施設は全国に4か所しかないが、施設入居待ちの方々が400名いる。年間で亡くなる入居者は約40名。亡くなる方が多い理由は、こちらに来た時には既に重度で、家で寝たきりで適切な手当も受けずにいたため床ずれをおこしており、それが原因で亡くなる方が多い。亡くなる方が多いもう一つの原因は、重度で末期の障害者の方が手の施しようがないということで病院から送られてきて、最期の時をセンターで迎えるということもあるからである。そのような方は余計にケアが必要である。少ない職員で出来るケアは限られており、今では病院からの搬送は受け入れていない。

職員が増えないのは、国家予算が少ないからである。予算の必要な省庁がたくさんあり、質の向上局には22の部所があり、均等に予算を割り振らないといけないので、こちらだけに予算を増やすことは難しい。もう一つ予算が増えない理由としては、予算をつけると限りなく増えていくので、どちらかと言うと予算を限って、「家庭や地域の中で障害者を支援していく」ということを充実させるためでもある。

説明を受けた後、施設見学をした。説明通りかなり重度の方々が入所されていた。暑いためか床に寝ている方もおられたが、経費節減のためか冷房設備は完備とはいかないようだ。竹かご等、手作り作品は見るだけになってしまったことを今は少し悔いている。



4. Phrapradaeng Vocational Rehabilitation Centre for The Disabled Person

(プラプラデン障害者職業訓練センター)

1968年設立。社会開発福祉省に属する国立の施設である。

入学要件：身辺自立していること
対象年齢：14歳から40歳（平均年齢26歳）
訓練期間：1年間
負担金：なし

ビデオを視聴した後、説明を受けた。47年前に設立された施設である。障害者の能力を引き出し、社会の中で自立した生活を送れるようにするのが目的である。①洋裁、②革製品、③電化製品、④コンピュータ関係、⑤工芸品などのコースがあり希望が優先される。食事や住居の提供もしており、娯楽などもある。また、学びたい人のための学費の提供や仕事の紹介等もしている。生徒たちは社会の中で自立した生活を送れるように頑張っている。一方で、ここに通うことのできない高齢者の方を支援するプロジェクトも行っている。家庭の中で少しでも生きがいのある生活を送れるように指導している。

ところで、タイでは100人以上の企業には1%以上の障害者を雇用することが義務付けられているので、つい最近もここからも3人の訓練生が就職をした。社会に出る前に自分たちが作ったものを実際に販売してみる等の「トライアルの支援」も行っている。また、障害者を看ている自宅を訪問して、より良い生活を送れるよう指導及び状況に応じた世話出来るように、こちらからスタッフを連れて行ってどういう状況にしたらいかが指導している。

ところで、このセンターは公的機関なので、センター以外の「地域のこと」にも予算を組んでいる。障害者や高齢者の生活条件の向上・知識の向上に予算を使って、公的機関としての役割をはたしている。2年前までは生徒数は100名で訓練期間は1年であったが、現在の生徒数は40人である。卒業訓練期間を短縮して、実際社会に出て仕事をするを優先した結果である。そのために、『一緒に仕事場に行って実際の仕事出来るようにする方針』に変わった。日本政府からも協力があって、カリキュラムが変わったとのこと。障害者の雇用義務が企業にあるので、入所してくる人は、「訓練が終わったら就職して欲しい」と企業から言われており、就職先はほぼ決まっている。

タイの障害者は「学ぶ機会」が今までなかったので、職業訓練だけでなく読み書きなどの学ぶ機会を与えて支援しなければならない。障害者が社会の中で自立して生活していけるような包括的支援をこちらのセンターでは行っている。

そして、このセンターのもう一つの機能は、身体的リハビリである。障害者はほとんど家から外に出ることをしていないので、“外に出ること自体も訓練”である。具体的には、地域の行事への参加や学校に出かけることをしている。さらに、先述したように基本的な読み書きをする。先生方がこちらに来て勉強を教えるといった具合だ。企業には「中学3年生程度の学力を有すること」との決まりがあるので、それをカバーする学力を身に付けることがここで出来る。

その他には、「精神的な感情のコントロール」が重要になるので、精神科の医師による精神の安定を図るといようなこともやっている。倫理観も学んで、企業に入ったらいろんな問題が出てくるので、どういう風にいかにか解決するか精神面での強さを育むこともやっている。ここで1年間訓練を受けた生徒たちは、他で訓練を受けた人たちよりも、かなり良い評価を受けている。ハード面では日本の方が数段上であることは分かっているが、ソフト面の「訓練の方法」などは、日本の指導を受けて行われており問題ないと思っている。

100人以上の企業は、障害者を雇用しないと『9千パーツ/月×12か月』の罰金を科せられる。政府としてはより多くの障害者に働いて自立した生活を送ってほしいと思っているが、実際には障害者を雇用せずに違約金を支払う企業の方が多い。

精神疾患の人たちにとって重要なことは、「理解をしてくれる人がいる」ことがとても大切である。手工芸の部屋で楽しそうにやっていたと思うが、忍耐強く教える先生が彼ら一人一人の出来ることは何か、興味があることは何かを探していく作業から始めて、実力をつけていく。但し、強要はせず、その先生の目の届く範囲であれば自由にあちこち行ったりすることを注意しない。安定した精神を養っていくことを行う。実際働きに出る場合は、仕事場がどういった状況であるか、理解してくれる人がいるかどうか仕事先の調査的なことをする。最初は一人で行かせないで先生も一緒に行き、生徒と企業のつなぎ役をする。

障害者を雇用した企業には、給料分が税の控除対象になる。また、障害者を雇用するにあたってトイレ等を改修した場合には、掛った費用の2倍が税金控除の対象となる。一方で、障害者を雇用しない企業は、障害者が作った物品を販売するブースを作るということでも良いとされている。

この後、施設見学をした。いつもは15時30分までの作業を、見学者のために16時過ぎまで延長していただいた。生徒たちの理解を得ているとの事で、やらせ感がなく皆楽しそうに作業をしていた。



【レポート本文】

九州地区の海外研修に参加させて頂き、今回で4回目となります。

入国してまず驚いたのは、国王に対する崇敬を払うよう教えられており、国王の誕生日が近い
ため、街中に肖像画が飾られていたことです。

また、仏教の国のため、各家の玄関先には、仏像がきれいに飾られ、日本との違いを改めて感
じました。

軍事クーデターもあり、政権の不安定さもあるが故に、貧富の差も顕著で、スラム街の中での
ドラッグの蔓延により、子育て、親育ての支援もコミュニティの中での支援をボランティアの手
により維持されている。障害者・老人の支援の在り方も日本との違いを改めて感じましたし、日
本の制度の良さも感じました。

また、日本の清潔さを考えると、人間は遅く生きられるものだとつくづく思いました。「何が
幸せか？」と考えると、「どうなんだろうな？」と思った次第です。

どの国へ行っても、その国にはその国の生き方があり、そこで必ず日本人の方が支援に活躍し
ておられる姿を見ると、感慨深いものがありました。

日本の良さも良くわかりますが、「全て良しとはいえない何か」があり、考えさせられることが
多くあった今回の海外研修でした。





日本福祉施設士会

九州・沖縄ブロック 第8回海外研修 報告書

2016年3月31日発行

発行：日本福祉施設士会 九州・沖縄ブロック 事務局

〒868-0025 熊本県人吉市瓦屋町 1106 善隣保育園内

TEL 0966-22-3573 FAX 0966-22-3705

【E-mail】zenrin@mx22.tiki.ne.jp